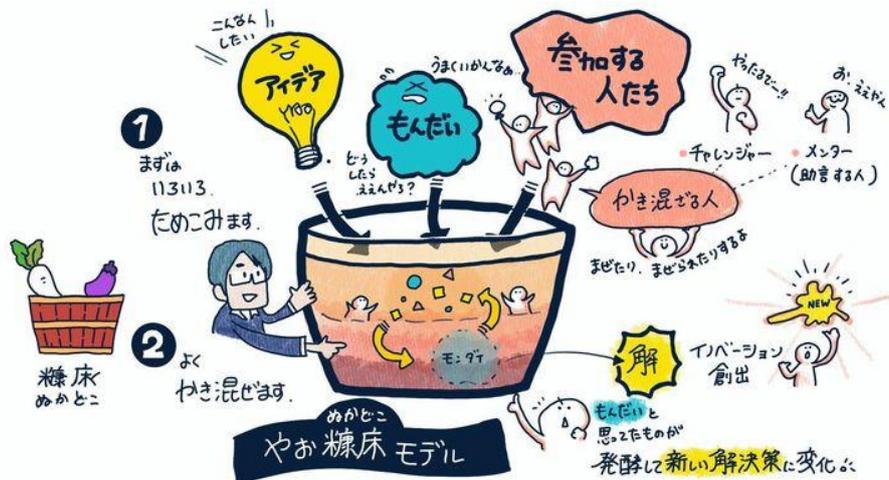


令和 5 年度八尾市産業振興会議 第 1 回本体会議 議事録	
日 時	令和 5 年 7 月 24 日(月) 15 時 00 分～17 時 00 分
場 所	八尾商工会議所会館 3階 セミナールーム・多目的室
出席者	<p><委員 13 名> 山縣座長、滝本副座長、今岡委員、岡田委員、檜本委員、梶本委員、黒木委員、佐藤委員、杉山委員、西川委員、美馬委員、山田委員、吉田委員</p> <p><事務局 9 名> 新堂部長、平尾次長、後藤課長、米田参事、山田課長補佐、稲森係長、岡田、杉原、運営支援事業者 肥後氏</p>
<p>－事務局による司会で次第に沿って進行－</p> <p>1. 開 会 事務局より、乾委員、佐原委員、寺西委員、服部委員、花村委員、三宅委員の欠席を報告。併せて、全委員 19 名のうち 13 名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第3条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることを報告。</p> <p>2. 魅力創造部長あいさつ</p> <p>3. 議事 －山縣座長による進行－</p> <p>(1)チェックイン グラフィックファシリテーターの肥後氏より、チェックインの方法について説明。 各委員、自己紹介を行う。</p> <p>(2)提言書の目次と構成について 山縣座長より、以下の提言書に記載する目次(案)の全体構成を資料に沿って説明。</p> <p>【目次(案)】</p> <p>■第 1 章 はじめに 座 長:この章では総論を記載し、本論は第 2 章からとなる。</p> <p>■第 2 章 糠床モデルと実証実験について</p>	



座 長:「糠床モデル」は、初めから整理された状態で議論する場ではなく、多種多様なアイデアや日常生活の問題点を集約し、偶然性によってそれらが結びついて、新たな解決策が出現することを期待している。そんなイノベーションの土壌となるのが「糠床モデル」である。また、今期の基本方針としての実証実験の説明について、現在、複数の実証実験を実施しており、それらは理科の実験のような厳密なものではなく、ざっくりとした取り組みである。第2章は、それらの枠組みについて記載する。

■第3章 具体的な事例について

座 長:第3章は、基本方針に基づいたこれまでの取り組みについて紹介する。小学校、中学校、高校等の教育現場において、これまでとは違った角度からのキャリア教育や新しい発想を生み出すためのカリキュラムの提供について記載する。

■第4章 考察

座 長:第4章は、実証実験の結果から見えてきたことや意義を整理して記載する。我々が行った実証実験からは、多くの事柄が明らかになりつつあり、実証実験を繰り返し行い、そこで得た成果を提供プログラムに適用することが重要である。

■第5章 提言

座 長:第5章は、実証実験の実施にあたり、八尾市に求めることを記載する。今期の産業振興会議の委員は、行動力のある委員が多いため、実証実験の提案から実施まで円滑に行えているが、今後委員の再編成があった場合は、これまでと同様に実施できるか懸念される。そのため、八尾市が主体となりプログラム考案から実施までのプロセスを構築し、委員再編成後も円滑な実施を継続させる必要がある。

■第6章 次年度に向けて

座 長:第6章は、今後実験していきたいことや、考案したが実施することができなかった実証実験を記載する。

(3)教育委員会向け別冊について

座 長:この別冊は、教育委員会向けに提言書から出前講座等のカリキュラムを抜粋し、詳細を記載した冊子となり、各学校が授業編成を行う際に、講座を授業として組み込んでもらうための説明資料である。内容は、方針、目標、出前講座等のメニュー表、依頼から実施までのフロー等を記載する。

■教育委員会向け別冊の作成に向けて、グループワーク

■目標について

座 長:子どもたちは「どうして、なんで?」と疑問をよく問いかけるが、大人になるにつれその疑問は少なくなるが、こういった子どもの純粋な疑問は、好奇心の延長線上にあり、クリエイティブを育む工程であると考えている。そのため、この要素を学校教育に導入し、産業振興会議考案のカリキュラムでサポートできるようにしたいと思っている。

委 員:仕事はつらくて楽しくないと思っている子どもが多い。

座 長:そんな子どもをなくすことが我々の目標です。

委 員:仕事を楽しむ生き活きとした大人の姿を示し、「仕事は楽しい」という認識を子どもに向けて育んでいきたい。

■学校へのアプローチ方法について

委 員:学校現場でこれらのカリキュラムを実行することは現実的であるか?

委 員:学校現場は業務に追われ、新たな試みを開始する余裕がない。

委 員:校長先生もそうですが、前線でやられている教員の方に訴えかける動きが必要である。

委 員:教員が追加の負担を感じることなく実施できる講座の設計であれば浸透しやすいと思う。

委 員:確かにそれは大事だ。そうしないと広まりにくいと思う。

委 員:講座の実施中は、教員が他の業務に専念できる環境を提供することが望ましい。それらが解決できれば、教員間は横の繋がりが存在するので一つの講座が好評を博すと、その講座は他の学校にも広まる可能性が高いと推測される。

委 員:横のつながりで広がれば、認知度も利用度も増える。

委 員:学校の通常の授業に講座を組み込むことができれば、教職員の負担は軽減され、糠床モデルの活動も持続的に行うことが可能になると推察されるので、非常に素敵な取組みだと思う。

委員：児童にアプローチする機会と教員にアプローチする機会の両方があったほうが良いと思う。

委員：そういった面でも、紙媒体のみでは魅力が伝わりにくい場合があるため、内容を説明する動画が利用できると、さらに理解が深まる。

座長：これらのアプローチを円滑に行う為にも、仕組みや受け皿を構築する必要がある。

委員：八尾市とみせるばやおが連携した枠組みも作れるのではないか。

委員：どこに講座を依頼するかが明確になっていた方が良い。

座長：依頼する流れを明確に提示することが必要だ。

委員：「当日の流れ」と「事前準備」についての説明資料があればわかりやすい。

委員：それがあれば教員の方もイメージがしやすい。

座長：それらを提言書の別冊で提示する必要がある。

■放課後こども教室での実施について

委員：放課後こども教室ならば浸透しやすいかもしれない。学校の公式な認可を必要としないため、実施する際の障壁が低いと推察される。学校関係はタイミングが決まっているが、放課後こども教室であればいつでも大丈夫である。

委員：放課後だと児童の集まりが悪くなる可能性があるのでは。

委員：確かに、放課後こども教室は放課後の時間に実施されるため、参加は希望者のみとなり、児童の集まりが十分ではなくなる可能性がある。

委員：一つの小学校だけの児童を対象とするのではなく、誰でも来れるように小学校以外の場所で実施することは可能なのか。

委員：小中学校連携の観点からも個々の小学校に限定した実施より、「中学校区」という広域の枠組での実施が有益だと考える。

■教育委員会と学校向けの別冊作成について

座長：10月には、教育委員会と校長会に別冊を提出し、その上で提案を行う予定である。また、その他、教科部会と教職員研修会でも提案する機会を設けた方がよいのではないか。

※教科部会・・・各学校の教員が集う研究部会

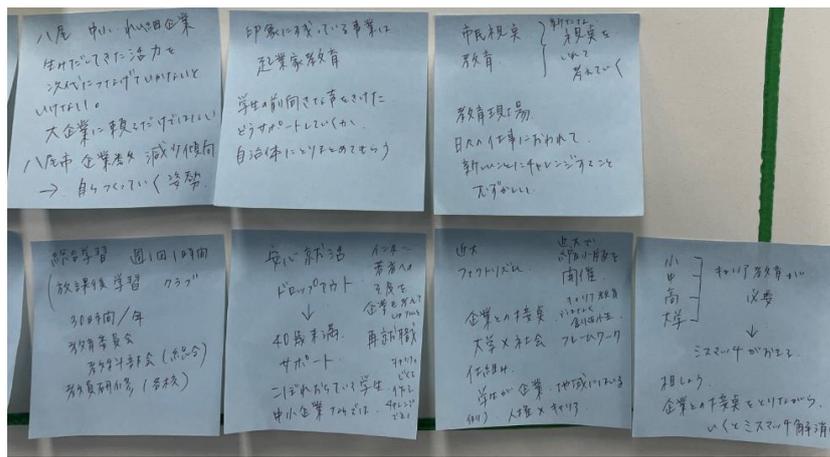
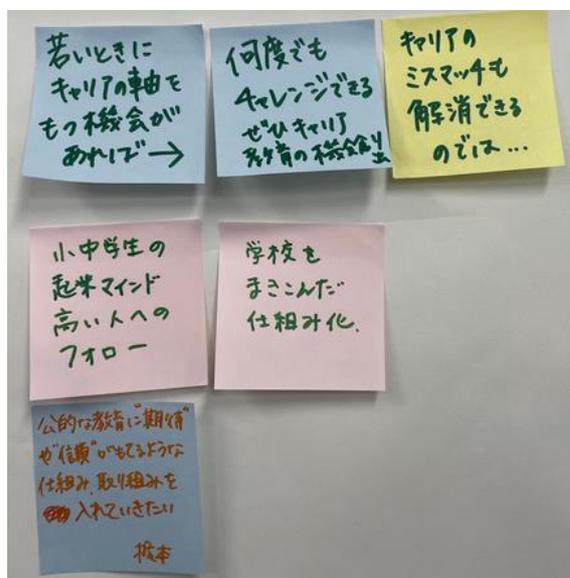
※教職員研修会・・・各学校で行われる研修会

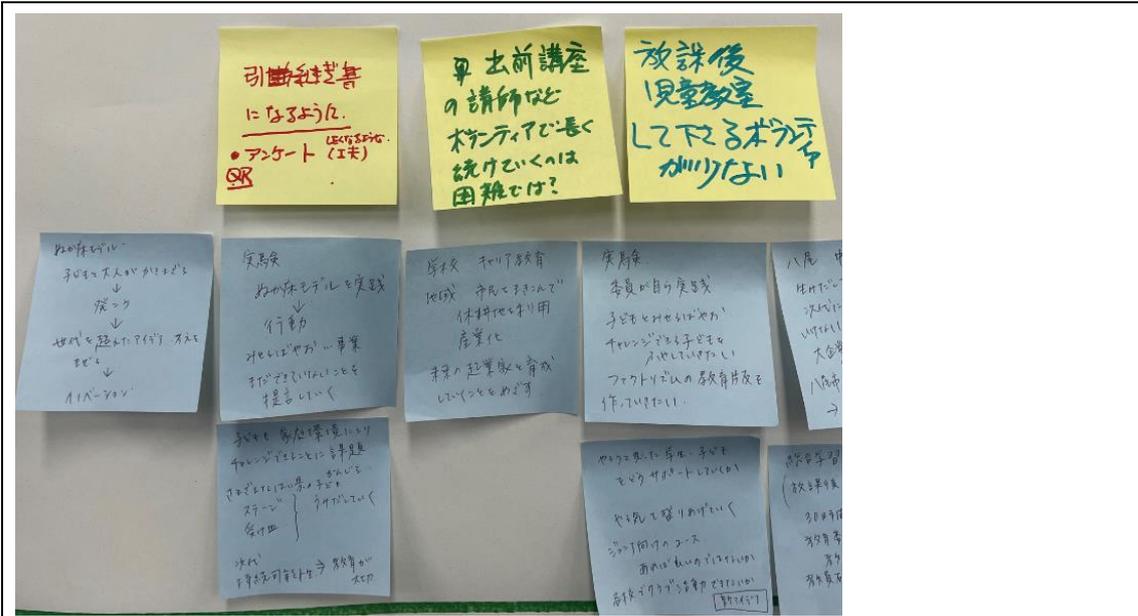
(4)チェックアウト

グラフィックファシリテーターの肥後氏より、チェックアウトの方法について説明。

各委員、提言書に掲載したい内容を付箋に記述し、第4回検討部会での議論の資料として活用することを説明。

(以下、各委員が行った付箋の記述)





(3)その他連絡事項について

次回の産業振興会議本体会議の連絡

3. 閉会

■産業政策課長あいさつ

以上